

育成年代サッカーコーチ(元Jリーガー)のコーチング実践知に関する ライフストーリー研究

原仲 碧¹⁾ 中山雅雄²⁾ 小井土正亮²⁾ 桑原鉄平³⁾ 森 政憲¹⁾ 浅井 武²⁾

Life-story study to coaching practical wisdom of youth team coach (a former J-league soccer player)

Midori Haranaka¹⁾, Masao Nakayama²⁾, Masaaki Koido²⁾, Teppei Kuwabara³⁾,
Masanori Mori¹⁾ and Takeshi Asai²⁾

Abstract

The purpose of this study were to study practical wisdom of coaching, and reconsider “coaching” from soccer coaches’ life-story. Semi-structured interviews were conducted with two coaches (former J-league soccer players) who are directing top-level youth soccer team in Japan. The result showed that coaches are learning from their own coaching experiences. Therefore, it seems important that coaches should work on practices that include “organic improvement” based on “reflective thinking”. In conclusion, “coaching” was reconsidered as “the workings of growth for coaches through their coaching practices” and this appears to be a different view from “conventional coaching”.

Key words: soccer, coaching, players development, qualitative research methods, life story

サッカー, コーチング, 選手育成, 質的研究法, ライフストーリー

I. はじめに

(公財)日本サッカー協会(以下、「JFA」と略す)によれば、日本代表チームは2015年までに世界のトップ10を目指し、代表強化、選手育成、指導者養成、普及を柱として、様々な取組みを行っている(JFA技術委員会, 2012)。これらの取組みの中、日本代表のFIFAワールドカップ(以下、「W杯」と略す)5大会連続本戦出場や、海外リーグにおける日本人選手の活躍など一定の成果が見られる。その一方で、W杯本大会における最高成績は過去2度の決勝トーナメント進出に留まっていることや、育成(ユース)年代の集大成とも言えるU-20(20歳以下)日本代表は2009年エジプト大会より4大会連続でFIFAU-20ワールドカップの本戦出場を逃すなど、その道のりが決して順調とは言えない現状を看過することはできない。このよう

な背景の中、育成年代に携わるコーチ¹⁾を対象に、コーチングの自明性を問う試みは有意義であろう。

スポーツ・コーチング(以下、「コーチング」と略す)は、「一般的に科学の学習で汎用される「仮説→実践→検証」という段階で組織することのできないもの」あるいは「コーチングの実践的な過程は、もっと多様で複雑な過程として展開されているのであるが、これまでその過程は不可視のものとして扱われすぎていたのではなかろうか」(内山, 2007, p.53)とその問題点が指摘され、その後の研究によって、コーチングは「コーチが競技者を勝利の実現に向けて先導すること」(内山, 2013, p.683)と原理的立場によって規定された。一方で「個々の特殊な事例的現象そのものが重視されそこから特殊な原理や法則性を見出す帰納的で実践的な思考態度が不可欠である」(村木, 1999)との主張もあり、コーチングを取り扱う研究において従来

1) 筑波大学大学院人間総合科学研究科3年制博士課程コーチング学専攻
Graduate School of Comprehensive Human and Sciences Doctoral Program in Coaching Science, University of Tsukuba
2) 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba
3) 東洋大学附属牛久高等学校
Toyo University Ushiku Senior High School

とは異なる視点によるアプローチが求められていると言えよう。

スポーツ現場における実践知を研究の対象とする會田は、自然科学的方法の限界を指摘し、「選手や指導者の実践知をリアリティ豊かに、科学的な知見として表現するには、質的研究が有効である」(會田・船木, 2011)と質的手法による研究の有用性を報告している。また、スポーツ心理学分野においては十年来、質的研究法による潜在的な価値の認知度が評価されているという報告(Strean, 1998)もあるなか、日本のスポーツ現場におけるコーチを対象とした質的手法による研究は、北村ほか(2005)の報告に代表される。北村ほかは、日本のエキスパート高校サッカー指導者を対象とした研究において、指導者のコーチング・メンタルモデルが「熟達化、意識化、及び、支援という3つの相互関係により構成されている」(北村ほか, 2005, p.24)ことを明らかにし、こうしたメンタルモデルは、「指導経験の浅い指導者や指導行動を再点検しようとする指導者にとって有効な判断材料に為り得る」(北村ほか, 2005, p.27)ことを提示した。その他にも、コーチの行動観察とコーチ及び選手を対象にインタビュー調査を用い、質的データを分析した研究では、指導が「指導の場を構成する〔教える者-学ぶ者〕間の相互行為の産物」(梅崎, 2010)であるという新たな知見が提示された。しかしながら、コーチ個々人の経験や内面に焦点を絞り、それらを実践現場においていかに活用しているかといった問いを設定し、コーチの有するコーチング実践知を記述することや、それをもとにコーチングそのものを再考しようとした試みはみられない。

近年、各領域の実践者が保有する知識や経験に着目した研究が行われている。特にスポーツ分野と類縁である教育分野ではその報告が多く見受けられ、例えば、松嶋(2005)による中学校教師を対象とした生徒指導における生徒との関係の経験に着目した研究や、岸野・無藤(2006)による教師としての専門性の向上における転機について体験の意味づけについて検討した研究などが挙げられる。また、コーチング学を包摂する体育・スポーツ学分野においても、現場や社会のニーズに応じた実践的な研究や質的データに基づいた議論が散見される(豊田・中込, 2000; 朝倉・清水, 2010; 吉田, 2012)。さらに、「量的研究では削ぎ落とされてしまいがちな人々の主観的な構造とプロセスを、質的研究は描きだせる」(山崎, 2011)といった質的研究に関する報告は、北村ほか(2005)の見解と同

様に、対象とする分野や領域を専門とする人たちに有用な知見が提示されることを主張している。これら一連の論説から、スポーツを介した人と人との繋がりフィールドであるコーチング学分野の研究においても、質的研究がもたらす知見が、実践と理論を結ぶために期待されることを示していると考えられよう。

Ⅱ. ライフストーリー研究

本稿では、育成年代サッカーコーチの語るサッカーに関する経験についてのライフストーリーを分析し、コーチング実践にどのように活かしているか検討をしながら、対象コーチのコーチング実践知の描出を試みたい。

ライフストーリー研究については、質的研究法を取扱う概説書において「対象者個々人の人生経験の物語をそれぞれの対象者と研究者との対話をとおしてともに生みだし、それをもとに、対象者が自らの人生経験をどのように意味付けているのか、…といったことを考察しつつ、対象者のライフストーリーを記述的に(再)構成したい場合に使います」(桂・星野, 2012)と説明されている。また、同様に「個人のライフ(人生, 生涯, 生活, 生き方)についての口述の物語である。また、個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つのことでもある」(桜井, 2012)と解説されている。さらに、ライフストーリー研究の理解・触発・記述をめぐる特質のもたらす知について「(a) 調査研究者と調査協力者との異化し・異化されるコミュニケーションによる新たな社会的現実(認識)の生成だけではなく、(b) 読者の追体験(経験の重ね合わせ)を可能にし、調査協力者(語り手)・調査研究者(聞き手=書き手)・読者(読み手)の三者が当事者となって(三者の経験が関係づけられて)、そこに参与的にコミュニケーションすることによって新たな社会的現実(認識)が構成されていくという生成を仕掛けていく、この二重の生成性こそが、ライフストーリー研究がもたらす「知」であると私は考える」(小倉, 2011, p.143)との報告も見られる。このような研究手法は、コーチング学分野において「新しい知の想像と方法論の開発に挑戦していかななくてはならない」(図子, 2010)とあるように、往々にしてその必要性が叫ばれながら、アプローチの少ない検討であったことは否めない。これらの背景を踏まえ、本稿では、

選手育成に携わる2名のコーチを対象に、質的研究法のインタビューによるライフストーリー法を用い、それぞれの語りをもとに論考する。コーチが「何」を語り、またそれを「いかに」捉え、意味付けを行っているのかをコーチング実践知として詳細に記述し、解釈していくなかで、コーチングの再考を試みることを本稿の目的とする。

1. 対象者

本稿では、関東地方の都市をホームタウンとしてJリーグに所属するXアカデミー²⁾において、同クラブのU-18チーム(高校生年代)に関わる大林氏(男性、40歳(インタビュー時)、監督)とU-15チーム(中学生年代)に関わる柿田氏(男性、37歳(インタビュー時)、監督)の2名を対象として調査を実施した(いずれも仮名)。2名のコーチは筆者の知人を通じて面識を持ち、「コーチの経験に関するインタビュー形式の研究」について書面ならびに口頭で伝え、協力をお願いした。コーチは2名ともJFAが認定するコーチライセンスを所有し、コーチとして生計を成り立たせているプロフェッショナルコーチである(大林氏:S級、柿田氏:A級)。また、2名のコーチはプロサッカー選手として10年以上のキャリアを有しており、いわゆる「熟達者」(北村, 2011)であった。2名のコーチはプロサッカー選手としてのキャリアが豊富であること、JFAの上級ライセンスを保持していること、近年の各育成年代の全国規模の大会で優勝を含め、頻繁に上位進出の実績を残し、なおかつ、コンスタントにトップチーム昇格選手を輩出する日本トップレベルのアカデミーに在籍していること、プロフェッショナルコーチとして選手育成に携わっていることなどから、本稿の目的に対して適任者であると判断した。

2. インタビュー調査の手続き

インタビュー調査実施の1週間程前にインタビュー調査内容に関する自由記述形式のアンケート用紙を対象者に郵送し、調査者(筆者)側で用意した質問に回答してもらい、インタビュー調査時には、それを「補助資料」(會田, 2008)として用いた。なお、自由記述形式のアンケートの内容は、1) コーチを志すきっかけ、2) コーチングで大切にしていること、3) コーチングではいけないこと、4) コーチングにおいて印象に残っていること、5) 選手時に受けたコーチング、6) コーチングに影響を与えていると感じるサッカーに関する経験、7) 今後のコーチングにおける課

題等、であった。インタビュー実施の際、あらかじめ作成されたインタビュー実施用紙を用いた半構造化インタビューによって調査者の質問に応えるかたちでライフストーリーを語ってもらった。ただし、ライフストーリー法の特徴を活かすため、対象者の語る流れに応じての具体的・個別的な内容に立ちいった形で柔軟に変化させながら語り展開された。また同様に、インタビュー場面でのやりとりには可能な限り自由度を設けることに注意した。

20XX年10月、対象者である大林氏と柿田氏の2名のコーチの都合に合わせ、Xクラブハウス内の食堂において、筆者がインタビュアー(研究者の立場)としてそれぞれ1回ずつインタビューを行った。インタビューの所要時間は書面で1時間程度と事前に通知し、大林氏が51分、柿田氏が1時間10分であった。インタビューを実施する前に研究に関する倫理的配慮について、口頭ならびに書面において説明した。インタビューは研究としての公表を前提にICレコーダーで録音すること、本人の意志により、どの段階においても調査への協力を拒否する権利を有すること等を伝え、同意書に署名後、実施した。インタビューの場で、調査者である筆者は、対象者の語りに敬意と好奇心を持ち、可能な限り対象者の語りを尊重しながら、適宜それまでに語られたことについて調査者側の理解や解釈を伝え、対象者の語りの意味の明確化や拡張を試みることを心がけた。また、「ライフストーリーはそれぞれの価値観や動機によって意味構成されたきわめて主観的なリアリティである」(桜井, 2002) 点に留意し、対象者の内なる声を聞き出し、誠実な態度で耳を傾ける姿勢でインタビューに臨んだ。調査後、インタビューを逐語的に文字起こしし、プリントアウトしたものを2名の対象者に郵送し、内容についての意見を求めた。2名とも内容に対する修正はなく、インタビュー内容の「妥当性」(桜井・小林, 2005)が確認された。

3. 倫理的配慮

本稿における調査は、筆者所属大学院の研究倫理委員会に研究計画書等(研究目的・手続き・分析方法及び、依頼書・同意書並びに資料や個人情報の取り扱いに関する事項を含む)を審査申請し、厳正な審査手続きを終え、倫理委員会ならびに所属長による承認を得た上で実施された。

Ⅲ. Jリーグアカデミーコーチのライフストーリー

ライフストーリーの呈示方法は、「[リアリティ]を伝えるべく「語り手の言葉をそのまま活かした部分と〈わたしが〉解説する部分とを交互に重ねて呈示する」(吉田, 2012, pp.578-579)「二重奏形式」(小林, 2000)とした。2名のコーチのライフストーリーを呈示するにあたり、考察ないし解釈はこの二重奏形式に倣い、その中に組み入れる形式とした。また、本稿の考察ないし解釈における立ち位置は、今田(1986)によって提唱された意味解釈法による方法理性に依拠する。以下、インタビュー中の「」は筆者、(大林)「」, (柿田)「」はそれぞれのコーチの語りの引用、語り内の「」は語りの中に出てくる会話(読者の理解に必要と思われる場合に限り(発話者)を表記)及び発話や擬声語等の表現、…は語りの省略、()は筆者がインタビュー時のメモ等を参考に記述した補足である。個人名は全て仮名にて表記した。また、国、地域、組織名に関しては適宜アルファベット及び仮名で表記した。インタビューデータに関して、筆者が個人の特定に結びつかないと判断したのに関しては逐語的に文字起こししたデータの通り表記した。本稿では、紙幅の関係上、サッカーに関する経験と密接な関係性を有するコーチング実践知の描出において、重要であると考えられるストーリーを中心に記述していく。なお、呈示されるストーリーは事前アンケート、全体の語りならびに、インタビュー前後や最中にとったメモ等を参考にし、筆者による選択及び判断に基づき記述されたものである。

1. 大林氏のライフストーリー

大林氏は、東北地方出身で高校卒業後にS(実業団チーム;後のX)に社員選手として入団。後にプロ契約を結び、15年(途中2年はJリーグ他クラブ)のキャリアを過ごした(Jリーグ加盟以前の5年を含む)。引退後から4年間X強化部スタッフ(普及コーチ兼)としてチームに携わり、翌年の20XX年からXアカデミーU-18コーチに就任し、S級ライセンスを取得。その翌年から監督に就任した。インタビュー当時のコーチ経験は4年(普及コーチ兼任期間を含めると8年)であった。

【語り1】サッカースタイルの変化

(大林)「ぼくがプロでやっていた頃の全盛のサッカーってやっぱりね、しっかり守備をしたなかで、素

早いショートカウンターだったり、というところで、どちらかという主導権を相手にわざと渡しておいて、カウンター仕掛けるサッカーだったんで。今はもう、全く真逆になってくるんで。サッカースタイルが、哲学が変われば、指導は全く違うんですよね——「その辺りで指導される内容が全くこう、変わってきてるということが、やはり受けてきた指導とは全く違うなあと」

(大林)「そうですね。そういう意味ではこういうふう(過去に受けたコーチングからの影響を否定する内容をアンケートに)書いてますけど。ただね、本当、こう普段やらなきゃいけないフィジカル要素だったり、選手としての気持ちの部分とかってというのは、もちろんね、そんなのは変わらない、変わらないと思うんで」

大林氏は事前アンケートにおいて、被コーチング経験が自身のコーチングに与える影響はないと回答した。その背景として、「いや、もうトレーニングメニューから全て変わっちゃってるんで」と語り、サッカーのスタイルやトレーニングメニューや、チームとしての哲学の変化等をあげた。「フィジカル要素」や「選手としての気持ち」等、変わらない部分もあるとしながらも、サッカーの変化とともに、サッカー観やコーチングの内容が変化してきたことから、大林氏の有する経験と、大林氏のコーチングにおける直接的な関連性は薄いと考えていることが見受けられる。

【語り2】サッカーへの姿勢

(大林)「(大林氏の現役当時は)「まあ、おれらサッカーやってればいいんでしょ」(大林)っていう。「結果出せばいいんでしょ」(大林)っていうような感じだったんですけど。ぼくらが今、選手に伝えているのは、もちろん結果もそうだけど、内容。Xとして誇りを持って。で、Xのプレイヤーとして、やると。ピッチ以外のところもね。ちゃんと、プロ、プロになる選手としてはどういう選手じゃなきゃいけないとか。うん。普通、ちゃんとね、あの、世間に、一般の人に混じっても、逆に見られてるわけだし。その辺のところはもう。昔はねえ、Jリーガーなんか茶髪でピアスして、外行って(外出して)ね。ちょっと騒がれて。…まあそういう時代もあった。実際ぼくらも、おれらもそういう時代を経験してるし見てるし。うん。で、そこに対して(コーチから)何か言われたかって言うと言われてないし。でもそうじゃなくて、もう本当にプ

ロってというのはあの、みんなの見本にならないと。なれるような人じゃなかったら、なる資格はないって逆に教えてるから。うん」

——「時代の変化とか、まあ社会的な立場の、回りからの見る目の違いとかもやはりそういった指導にはかなり影響を」

(大林)「うん。そうそう。「そこ(プロサッカー選手を志す人間としての立振舞い)ができないんだったら、もうサッカーをする資格はない」(大林)というふうに言ってるから。昔はね、「サッカーしてればいいんでしょ」(選手)ってというような雰囲気。その辺もね、やっぱ違う、違いになってくる」

大林氏がアンケートにおいて記述した「サッカーへの姿勢」に関して「昔よりは意識はもう違いますね」と、大林氏が選手時代の経験とは状況が大きく変化しており、「まあ実際(記憶に)あんまなくて、覚えている、印象に残ってる言葉とかもなくて」と当時のコーチから受けたコーチングから印象に残っている事例は特にないと語った。一方で、大林氏が現在コーチとして関わる選手に対する要求は「そこ(プロサッカー選手を志す人間としての立振舞い)ができないんだったら、もうサッカーをする資格はない」と、時代や社会的変化を起因とするものであった。15年に渡るプロ経験やプロサッカー選手が置かれる社会的立ち位置の変容のなかで構築された大林氏の価値観を規準としたコーチングを意識していると考えられる。サッカーと直接関連するオン・ザ・ピッチにおけるプレーに関する事柄だけでなく、サッカーを離れたオフ・ザ・ピッチにおけるプロサッカー選手としてのあるべき姿に対するコーチングに重点を置いていることがうかがえる。

【語り3】コーチングのスタイル

(大林)「うーん。キャラクターで言ったら、えーっと。基本あまり怒らないようにはしてる。さっきも話したけども、その、コーチってね、言葉があって。要はその、選手を、チームを引っ張って行く、グイグイ引っ張って行くタイプではないと思うので。どっちかって言うと、ナビゲーターじゃないけど、「こうするんだよ」(コーチ)「チームとしてはこういうやり方でやるよ」(コーチ)っていう、ナビゲーションをして、で、それに対してチームが勝手に動き出すように持っていきたい。で、ちょっとズレてるやつがいたら、ちょっと修正してあげる。指摘してあげる。で

も、引っ張れる、そのグループの中でどんどん先頭を引っ張れるやつは前にいると引っ張っていき。ってというようなこう、状態を作るような」

大林氏はインタビューの途中で会話の内容を現役時代の監督についての補足に戻した。

(大林)「森田さん(大林氏が現役時のX監督)はすごい先頭で行く感じがあったんで、選手としてはすごい楽だった部分はあるんだけど。その、伸びなかったかもしれない。その、森田さんが結局いなくなったことでXって「ガタッ」って成績が落ちた。それじゃあ困るし」

——「その辺り、プロの指導者、トップの指導者と育成年代を指導されてるってことでの違いもありますか」

(大林)「まあ多少あるけど、でも。うん。そんなにでも大きく変わりはないのかなって気はしてる」

——「とういうと、やっぱり大林氏がチームを離れた後でも、そのチームが、ぶれずに行けるといような」

(大林)「もちろん、もちろん。ちゃんと。というか、勝手にあとはその、ここに、今やってる子たちはね、トップ行ったり、大学に行ったり、次の進路に進むわけだから。うん。ここから離れたから、何も、ねえ。「大(大林)さんから離れたから、何もぼくからできなくなった」(アカデミー選手)じゃあ困る、ほんと困るし。Xから離れたからできなくなるじゃあ困るんで、ある程度自分たちでもちゃんと進めるように、自立したところを作っておかないと。私生活も、サッカーに関して」

——「そういった面で言うと、(U-16(高校生年代)からU-18の)3年間だけではなくもっと長い目を、見据えた指導を実際にされていると」

(大林)「そうですね」

——「ピッチ内でも、ピッチ外でも。」

(大林)「だから本当、目的はね、そのトップチームにやっぱあげることだから。うん。そう。そこはやっぱり大きなところだと思う。トップ、プロになったから満足してしまう選手だったらね、困るわけだし。プロにあって、レギュラーになって、代表に入って海外まで行くような選手をやっぱ育てなきゃいけないと思ってるんで。うん」

大林氏は現役時の監督を尊敬するが、当時の監督の

スタイルは大林氏の目指すものではないという旨を語った。コーチ独自のカリスマの重要性を理解しながら、選手育成を長期的な視点で考えた際、コーチのカリスマ性が有する影響力に頼るスタイルの脆弱さを指摘した。大林氏が目指すコーチングスタイルとして、大林氏がXから離れたとしても選手が変わらずプレーできるような「ナビゲーター」としてのスタイルの確立について語ったことから、コーチングスタイルに対する一貫した考えを読み取ることができる。

【語り4】海外チームの現場

(大林)「(S級コーチライセンス講習会の課題である)海外研修で。まあその前からもう、(バルセロナが)好きだったのもあるし。うん。まあXのアカデミーが目指してる場所もそれに近いものがあるんで。うん。まあそこはもうかなり影響は受けていますね」

——「具体的にどういったことが影響を受けられていますか。哲学の部分であるとか、指導の方策とか」

(大林)「うん。だから。うーんとね。まず、クラブの哲学のところ。で、えー、(Xと)哲学の内容は多少ずれるかもしれないんだけど、その、ただ1つクラブがそういうフィロソフィーをもってやれるかやれないかっていうので、大きく変わってくると思うんだよね。何となく育成持ってる下部組織があって。で、でもいろんなコーチがいて、いろんな指導をしながらやっていくのも1つの手だと思ふし。Xはさっきも言いましたけど、本当に一本ね、芯を通して指導して。それがもうクラブ(X)のフィロソフィーになってきてるので。うん。それをぶれずに。やれるのは、やってたのは、もちろんバルサ(バルセロナ)だと思うし。うん。それはすごく参考にしたと思う」

大林氏はサッカー先進国のクラブチームの視察から、「それ(あるトレーニングメニュー)をジュニア(小学生年代)から、…U-18.で、ジュニアから同じメニューを、トレーニングをちゃんとやってる」とコーチングにおいてチームとして1つの哲学を共有することの重要性を実感し、チームマネジメントの部分で参考にしたという旨について語った。また、Xアカデミーにおいて「本当に一本ね、芯を通して指導して。それがもうクラブ(X)のフィロソフィーになってきてるので」や「(海外のコーチは)基本みんな情熱家だね」と海外でのコーチング現場において参考になった面をアカデミーに持ち帰ってスタッフ間で共有するなどの取り組みを行っているということから

も、海外チームのコーチング現場の影響を受けていると考えられる。日常ではなかなか経験し得ない環境から学ぶ姿勢や態度はコーチにとって価値あることであり、その経験から、自分たちの所属組織に還元することの重要性を認識していると考えられる。

2. 柿田氏のライフストーリー

柿田氏は関東地方出身で、Xユースからトップチームに昇格した後、プロとして10年(最終2年はJリーグ他クラブ)のキャリアを過した。引退後はXに戻り、アカデミーのコーチとしてクラブに携わることとなった。20XX年よりU-15監督に就任。インタビュー当時のコーチ経験は8年(U-12(小学生年代)監督1年、U-14(中学生年代)、15コーチ7年)であった。

【語り1】プロとしての姿勢

(柿田)「まあもう当然、プロサッカー選手で勝負していくっていうと、ねえよく言われるのが複数年とか1年契約とか言われるんだけど。その職業を持って1年契約っていう。…でも実際やっぱね、年齢をこう重ねるにつれて、結局その、プロでやっていく、プロで食べてく、サッカーで食べていくってものの、厳しさっていうか。当然浮き沈みがあって。沈んだ時期を経験していれば、外(他チームに)出されちゃったりとかね、クビになったりとかすることがあって。あのそういう挫折で、厳しさを知る。要はメンタリティというか、弱いやつじゃこう、這い上がれない。…まあそういうのも含めて結局その、自分のこのねえ意識、メンタリティの強さがないと、本当のバイタリティがないと、勝負していけない世界なんです。プロってやっぱり。…本当にその、本当に、その来週の次の試合のその1日の中の1時間、2時間の試合のために全力で、こう、自分を、あのしっかりとコントロールしていくプロ意識っていうのは、今のアカデミーの教える子の現場に立っても、あの、まあアカデミーなんて言ったら今ね、もうJリーグの下部組織(アカデミー)って言ったら、プロの集団の下部組織だから。ね、そこで、こうプロになれるやつが多いって環境でもあるから、そういうのをちゃんとしっかり植え付けていく。だからそういうことを知っている自分にとって、やっぱりちゃんとそのプロ意識の大切さというか、自分をしっかりとコントロールしていく。まあアカデミーの選手に伝えられることで、まあもっと具体的に言ったら、本当にその、プロじゃないけど、やっぱりそのプロを目指す集団、選手にとって、本当

に今まで、アプローチされなかった、その食事の部分だったりとか、睡眠、あと練習に対する情熱とかサッカーに対する情熱とかそういうのを習慣化させることがすごくぼくらにとってはこう、大切で、まあそういう経験をしてきたからこそ、こう、そういう、情熱を伝えられるのかなとは思っているんですけど」

柿田氏はプロサッカー選手としての経験を活かし、「そういうことを知っている自分」が「プロ意識の大切さ」「自分をしっかりコントロールしていく」等の「情熱」を現在コーチとして関わりを持つ選手に伝えることの重要性について語った。また、柿田氏自身の経験を振り返り、その経験と重ね合わせながら、プロサッカー選手として大切にしなければならないと感じる意識や「プロを目指す集団」としての行動、「食事」「睡眠」といった生活習慣等を、育成年代の段階から植え付けていくことに重点を置く考えを語った。さらに、アカデミーに所属する以上、社会的立場を踏まえた自覚を選手たちに促すことも把握している。そのなかで、プロという厳しい世界で活躍していくためにはどんなときでも備えておくことが重要で、柿田氏が経験してきたことだからこそ伝えることができる強みであると自覚していると考えられる。

【語り2】 受けた言葉

(柿田)「まあプロでやってたときに、自分はまあ割と早い段階でデビューをして、Xに8年いて、R(Jリーグ他クラブ)に2年いたけど、あの、プロの1年目のときに、直接その、ブラジル人の監督だったんだけど、結局その人の監督とブラジル人選手が助っ人で来て、まあアンドレスっていうみんな知っている、ぼくの世代の人はみんな知っているんだけど、そのアンドレスがこう言ったことで、まあ指導者じゃないんだけど、でももうその当時はもう超ベテランで、もう指導者並みの、本当に、グラウンド上の監督みたいな方なんだけど、その人に言われたのは、結局、指導でって言われたらあれだけど、あの「サッカー選手っていうのはあの、試合に出ることが成功でもないし、えー成功でもないし、えー簡単ではない、簡単ではないんだ。出ることじゃなくて、出続けること」(アンドレス)うん、その「(レギュラーとして)いることじゃなくて、い続けることが、今の自分が変わらず、在り続けることがその、成功なんだ」(アンドレス)っていうようなことを、自分が(トップチーム昇格後)ちょうどすぐに(試合に)出て、あっという間に「ダダダ

ダ」って、こう、あの、レギュラー確保して、経済的にもこう、何て言うんだらうな、うーん、もう、ほんとにマスコミにもこう、取り上げられて、ちょっと天狗になっちゃってのときに、そういうこと言われたのが、こう常にこう、ちょっと自分が見失いそうになったときでも、その言葉で、ちょっとこう思い留まるような、こう、言葉っていうのをかけてくれたっていうのはすごくこう、自分では、こう影響与えた(受けた)っていう、まあ指導、まあ具体的な指導じゃないけど、まあでも言葉がけてところでは指導に近いのかな」

柿田氏は現役時代、同チームに在籍したベテラン選手から受けた言葉に感銘を受け、様々な場面において自分自身をコントロールすることができた経験について語った。コーチからの具体的なコーチングではないものの、言葉がけの部分の重要性を認識し、コーチとなった現在は選手たちに「納得してやってもらえるような(プレーできるような)説得力のあるような言葉を勉強しなきゃいけない」と語った。柿田氏が影響を受けたと語る「ぼくの世代の人はみんな知っているんだけど」というベテラン選手は「世界的な人」(世界的に活躍した選手)で、そのような選手の言葉だからこそ、自身に響いたことを振り返った。一方、柿田氏がコーチングする選手は「ぼくが現役の頃は、まだ赤ちゃん」で、柿田氏がベテラン選手から影響を受けた場面とは大きく状況が異なる。そのなかで自身のコーチングと置き換えて、選手から「やっぱこの人が言うからだよな」というコーチングを心がけるものの「全く今はそれができているっていう自信はないです」と、その難しさを認識していることがうかがえる。

【語り3】 海外チームの現場

(柿田)「あの、まあスペイン行って、アトレチコマドリードのその監督さん、U-15の監督さんは基本的には、…あの、トレーニングのときに、全く、あんまり言わないの。コーチングを、あの、シンクロ³⁾で(コーチングしていた)、止めたりしないの。「フリーズ(ゲームフリーズ)⁴⁾を、フリーズっていうのは、あんまりないね」(柿田)っていう話をしたら「いや、フリーズなんかはする必要はなくて」(アトレチコマドリードU-15監督)要は、やらないやつはもうクビ(他チームへの移籍)になっていっちゃう環境なんだけど、みんなやる、それはもう最低限、集中してやるし、トレーニング、試合のようにトレーニングしてる

し。うん。ただ、その選手の発想だったり、選手の言い分だったり、選手の気持ちだったりっていうのは当然リスペクトしてて。うん。それが全て。だからそんな、1人1人にそんな。その人を戦犯扱いして、「バサッ」って止めて、いちいちそう(フリーズ)やって正したりとかするんじゃないで。[そういうときはシンクロで、ある程度やんわりとこう、その人のプレーっていうのを尊重しながら、こう選択肢を植え付けていけばいいだけのことなんだ](アトレチコマドリードU-15監督)。みたいな。だからトレーニングが、しっかりとこうオーガナイズされてて、いい習慣があれば、何もいちいちこう、ね。「ピッ」(ホイッスル)って止めて、「お前のプレーな」(コーチ)ってところでその人が戦犯扱いにならないというか、する必要ないっていうか。なんかね、そういうもう、そういういいトレーニングのサイクルができあがってる。ビッグクラブのアカデミーは、うん。やっぱりそういったのを見たときに、まあちょっと自分にも影響受けたというか、「ああ、そういうふうな」(柿田)そういうね、自前なそういうそのいい習慣、いいグループ、いい教育があれば、うん。そんないちいち、サッカーの、まあサッカーのね。スペインの、そのスペインのサッカーの歴史とか、サッカー先進国であるから、ちっちゃい(小さい)頃からそういうサッカー見れば、当たり前のように、スペイン代表のように子どもたちもプレーする、プレーするし、しようとするし、バルセロナみたいに。うん。その差、違いはあるにせよ。うん。そういうね。しっかりとこう、当たり前前のことをさせれる習慣とか、こう、いい教育、いいその習慣があれば、結局のところ、そんなにこう、いちいちいちいちそのプレーに対してこう、止めたりとかする必要とかはあんまりなくなるものなんだなっていう。本気でやってるとか、本気でこう、戦ってるとか、本気でこう、監督に認められようとしているような、そういう、傾向が、あの、風潮があれば、結構意外となんでもスムーズにこう、コーチがいちいち「ピーピーアーアー」言わなくても、本当にちょっとした言葉がけで済んじゃうっていう。…そういうあれですよ。ちょっとしたこう、何ちゅうのかな。気付きはありますけどね。自分は、まあだっって自分だけでも、そういうレベルに立ってないっていう

柿田氏は自身のコーチングに影響を与えていると考える事柄として、海外チームの現場視察を振り返り、サッカー先進国のビッグクラブのアカデミーとの差を

実感した経験について語った。具体的には、サッカーが文化として根付いている地域(スペイン)の選手やコーチの意識の違いや、コーチングなど、柿田氏や、日本サッカーのコーチング現場における課題として感じたことをあげ、今後の改善点として認識していると考えられる。また、今まで積み上げてきたコーチングを振り返り、「まあだっって自分だけでも、そういうレベルに立ってないっていう」と今の自分自身に力がないことを認めた。

IV. コーチのライフストーリーから意味解釈されるコーチング実践知

本稿は、質的研究法のインタビューによるライフストーリー法を用い、Jリーグアカデミーコーチが過去の経験について「何」を語り、またそれを「いかに」捉え、意味付けを行い、コーチング実践に活かしているのか検討するなかでコーチング実践知の記述及び解明を試みた。コーチング学分野においてこれまでにない方法から2名のコーチのライフストーリーを考察した上で、2名のコーチのコーチング実践知を「省察(せいさつ)⁵⁾的思考による受容」及び「有機的改善の継続」という視点において解釈していく。

1. 省察的思考による受容

大林氏は自らのコーチングについて「自分が、あんまりちゃんと理解していないことっていうのは、言わない方がいいかな」や「今日のトレーニングは全然上手くいかなかった」「メニューがおかしかったのかな」「人数構成とかいろんなことが何かあったんだろうな」と真摯に振り返った。また「会心のトレーニングってまだ、そんなにないと思う」「完璧なトレーニングは絶対ないから」「万能なトレーニングって絶対ないから」や、トレーニングにおけるコーチングの失敗に関しても「つきものだろうね。もう、日々、日々そう」と冷静に受容していると考えられる。一方柿田氏は、コーチライセンス講習会において「自分の感覚でやっていただけ」に頼ったコーチングの難しさを実感したと同時に、「それが逆に興味になった」「ああ、こんなに面白いんだ」と感じたことがコーチを志すきっかけとなった。またコーチとしての経験を積み重ねた現在も、自らのコーチングについて、「もうリアリティのないというか」「ゲームでこれないじゃん」(アカデミー選手)「有り得ないじゃん」(アカデミー選手)といったトレーニングにおける失敗を「今でもあ

るんだけど」「それはもうしょっちゅうあるよね」と大林氏と同様、実直に受容していると考えられる。コーチは経験をもとに継続的に組織、コーチング及び評価を強化、確認することがCushion (2011) によって報告されており、両氏はそれぞれの経験をもとにそれらを習慣化することの重要性を認識していると考えられる。

2. 有機的改善の継続

大林氏は「サッカーのスタイルもまた変わっていく」ものであり、サッカーの情報に関して「アップデートしていかないといけない」と理解している。また、アンケートでコーチングの向上について記述し「(選手に) もっと的確に響く言葉」「言葉探し」「(ストーン) って入るような相応しい言葉」を「常に探して」「見つけてというか、していかないといけない」や「本当、日々改善するようにはしてますね」とあるように、コーチングの向上を模索し、コーチングに対する改善を継続していくことの重要性を認識していると考えられる。一方柿田氏は、自身のコーチングについて「ちょっとずつ、ちょっとずつこう、自分も前進しなきゃいけないので」との認識から「(コーチングにおける) 言葉の持つ意味なんかは常にこう考えて」コーチングを実践することを心がけている。その過程においても「もっとこの的確な言葉があったかもしれない」と自問し、「当然、自分で工夫して、振り返って勉強して調べたり」といった思考によってコーチングの改善を意識している。さらに、近年のXアカデミー出身選手の活躍についても「これで全然満足してはいない」と語った。「まだまだもっと良い」コーチングをすることで、アカデミー組織としての成長の停滞を危惧し、現状を「キープしていくのも難しい」といった認識から、継続していくことの重要性を理解している。また、これは柿田氏が選手時代にアドレスから受けたアドバイスの内容に近似したもので、選手としての経験をコーチングに応用しているとも考えられる。Mallett ほか (2009) は形式的なコーチ育成の限界を指摘しており、上述した両氏の現場における実践を通じたコーチング技能向上の取り組みは、コーチ育成の観点からも、重要な知見となり得る。

3. まとめ

本稿で対象としたコーチの語りから、コーチは過去の経験について、ポジティブ、ネガティブな事例に関わらず冷静に受け入れ、自らのコーチングに踏襲する

のではなく、コーチ自らによってそれらの経験を解釈した上で、修正し、コーチングに活用するといった方策を採用していることが確認された。このことから、コーチは自らのコーチング実践を省察的思考によって振り返るなかで、コーチとしての成功体験を好意的に捉えるだけでなく、失敗事例も誠実に受容しながら、選手育成に関する長期的な視点で日々のコーチング実践における有機的改善を絶えず繰り返していることが推察される。これは「コーチは自らに「脱体験化」への研鑽を課していかなければならないことは至極当然であろう」(内山, 2013, p.690) や、教育学の見地から様々な分野の専門家についての分析によって提示された、「反省的实践家」(ショーン, 2001) という概念をもとに「反省的实践家としてのスポーツコーチ像」を考究した報告による「[反省的实践家] 論はコーチングにも応用できるであろう」(陰田ほか, 2013, 2014) という説を支持するものであると考えられる。また、2名のコーチのライフストーリーから読み取れるサッカーへの姿勢や態度から、サッカー選手として熟達化を成し遂げた経験や方略を活かし、コーチとしての熟達化に順応している可能性がうかがわれる。このことは「コーチの存在理由は、なによりも「自分(の競技レベル)より優れた選手を育成する」と言う点にあるはずです」(佐藤, 2011) との指摘にある通り、コーチが対象とする選手の目標に対してどのようなコーチングを心がけるのかということにおいて重要な視点を含むであろう。

V. おわりに

本稿の試みから、コーチは過去の経験から学び、自らのコーチングを「省察的思考による受容」をもとに「有機的改善の継続」によってコーチとしての熟達化に向けた取り組みを日々実践することの重要性が新たに提示された。このことから、コーチングという名辞を「コーチによるコーチング実践によって、コーチ自身を成長させる営みである」と、従来にない視点によって再考することができよう(図1)⁶⁾。

これらは一見自明のことのように考えられるが、コーチが自らの経験について、ライフストーリーを語ることによって振り返り、自己をどのように捉えているか追考することによって生成される新たな気づきは、コーチ本人にとってだけでなくコーチング学への貢献という観点においても中核的な知見となり得る。ライフストーリー研究の特徴として「読者が、ひとつ

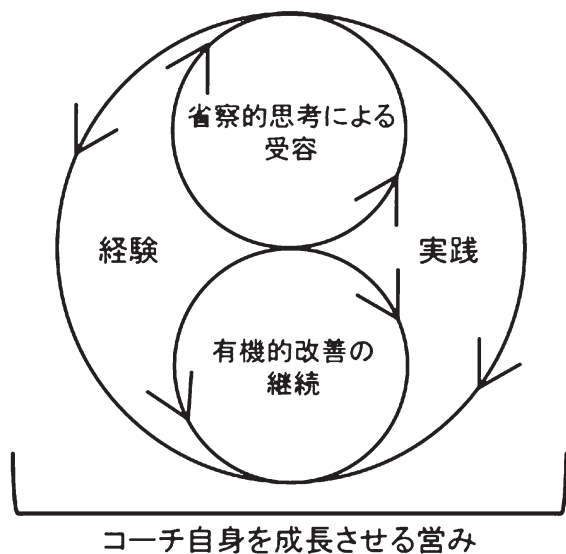


図1 コーチング実践思考モデル

の社会過程たるライフストーリーの生成プロセスを体験(追試)出来るようにし、そのことによって調査協力者(語り手)、調査研究者(聞き手=書き手)、そして調査研究作品の読者(読み手)を出会わせ(相互に関係づけ)、三者間での経験的コミュニケーションを可能にしていくこと(小倉, 2011, p.147)が指摘されており、本稿のライフストーリー研究によって生成されたコーチング実践知が現場においてどのように活かされていくのか、今後の検討が必要であろう。本稿の解釈を実践現場において了解可能な存在へと完成させるため、本稿におけるアプローチをさらに展開、蓄積し、コーチ・研究者を含めた相互主観的世界での批評に晒されることが必要不可欠である。そのプロセスにおいて、解釈に修正が加えられ、研磨されるなかで、多種多様な環境下にある育成年代のコーチング実践現場(生活世界)と理論(科学的世界)を含めたトータルな世界で相互主観的な妥当性の追求が求められる。また、本稿において十分な潜考がなされていない、オン・ザ・ピッチ、オフ・ザ・ピッチにおけるコーチングや、コーチの価値観などについても克明な論考が要求されよう。コーチの資質向上につながるための理論を構築し、実践現場で活かしていくため、今後も様々な視点に立脚した研究データの積み重ね、及びその検討の継続を期して本稿を括る。

注記

- 1) 「コーチ」「指導者」の表記が混在するが、本稿では同義語として扱う。記述に関してはインタビューのやりとりを除

いて「コーチ」に統一するが、引用、参考文献に関してはその限りでない。また「コーチング」「指導」に関しても同様の扱いとする。

- 2) JリーグアカデミーについてJリーグ公式サイト(2014)では「Jクラブにおける公益財団法人日本サッカー協会(JFA)の加盟チームに関する規定に定める登録種別の第2種、第3種および第4種に属するチームの総称を「アカデミー」としています。Jリーグアカデミーは、Jリーグの指定する指導者資格を有し選手育成を管理統括するアカデミーダイレクターを擁することを条件としています」と記述されている。
- 3) トレーニングを行いながら、その最中にストップさせずに流したままその場で起こっていることについてコーチングすること。
- 4) コーチングをしたい場面が出た時点で状況をいったんフリーズさせ(止めて)、問題の起こった場を再現したコーチングを行うこと。
- 5) 畑村は省察(せいさつ)について「反省と意味は同じですが、省察にはネガティブな響きがない」と説明する。また、省察の中身について「決断し、行動して、起こった結果を省みることです。結果の要素を抽出し、構造化して考える。それを文章や絵でまとめて知識化する。こうした行程を踏んだ省察だけが他者に正しく伝わり、次の機会に生かせるのです。そこに自己批判は必要ない。結果を正しく受け止めて正しく分析するだけのことです。省察は次に動くためのエネルギーを生み出すのです」(畑村, 2007)とまとめている。本稿で扱う「省察」はこの畑村の説に立脚する。
- 6) 本稿で生成されたコーチング実践思考モデルは、金川(2006)を参考に図説したものであるが、2名の対象コーチのライフストーリーをもとにしており、極めて限定的なレベルに留まると考えられる。今後は、本稿で明らかにされた視点をもとに、木下(2003)の提唱する人間行動のプロセスの説明や思考・理論モデルの生成に長けた方法論であるM-GTA(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)等を用いた、より詳細な検討が必要であろう。

文献

- 會田 宏(2008)ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的研究: 国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに。体育学研究, 53: 61-74.
- 會田 宏・船木浩斗(2011)ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する質的研究: 大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手がかりに。コーチング学研究, 24: 107-108.
- 朝倉雅史・清水紀宏(2010)体育教師の信念に関するエスノグラフィ。体育・スポーツ経営学研究, 24: 25-46.
- Clifford J. Mallett, Pierre Trudel, John Lyle and Steven B. Rynne(2009) Formal vs. Informal Coach Education. International Journal of Sports Science & Coaching, 4(3) 325-334.
- Chris Cushion(2011) Pierre Bourdieu: A theory of (coaching) practice. In: Robyn L. Jones et al. (Eds.) The Sociology of Sports Coaching. Routledge: Oxon, p.50.
- 畑村洋太郎(2007)決定学の法則。文藝春秋: 東京, p.242.

- 今田高俊(1986) 自己組織性—社会理性の復活—。創文社：東京, pp.5-137.
- Jリーグ公式サイト(2014) <https://www.j-league.or.jp/about/jleague/activities/player-development.html/>(情報取得2014/10/31)
- JFA技術委員会監(2012) サッカー指導教本2012 JFA公認C級コーチ。公益財団法人日本サッカー協会：東京, p.10.
- 陰田隼貴・入口 豊・上野大樹・ベネット・ブレイク(2014) 反省的実践家としてのスポーツコーチに関する研究(Ⅰ)。大阪教育大学紀要, 62(2)：23-35.
- 陰田隼貴・入口 豊・上野大樹・ベネット・ブレイク(2014) 反省的実践家としてのスポーツコーチに関する研究(Ⅱ)。大阪教育大学紀要, 63(1)：33-44.
- 金川舞貴子(2006) 校長養成・研修におけるショーンの反省的実践家論に関する一考察 ～M.エロウのショーン批判を手がかりに～。広島大学大学院教育学研究科紀要, 55：133-142.
- 桂 敏樹・星野明子(2012) かんたん看護研究。南江堂：東京, pp.142-143.
- 木下康仁(2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践。弘文堂：東京, pp.89-91.
- 北村勝朗・齊藤 茂・永山貴洋(2005) 優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか?—質的分析によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築—。スポーツ心理学研究, 32：17-28.
- 北村勝朗(2011) 熟達化の視点から捉える「わざ言語」の作用。生田久美子ほか編 わざ言語—感覚の共有をとおしての学び—へ。慶應義塾大学出版会：東京, pp.33-63.
- 小林多寿子(2000) 二人のオーサー。好井裕明・桜井 厚編 フィールドワークの経験。せりか書房：東京, pp.104-114.
- 松嶋秀明(2005) 教師は生徒指導をいかに体験するか?—中学校教師の生徒指導をめぐる物語。質的心理学研究, 4：165-185.
- 村木征人(1991) スポーツ科学における事例研究の意義と役割—コーチング理論と実際の乖離撞着を避けるために—。スポーツ運動学研究, 4：129-136.
- 小倉康嗣(2011) ライフストーリー研究はどんな知をもたらす、人間と社会にどんな働きかけをするのか—ライフストーリーの知の生成性と調査表現—。日本オーラル・ヒストリー研究, 7：137-155.
- 梅崎高行(2010) サッカー指導における相互的なバイアス構成の検討。教育心理学研究, 58：298-312.
- 内山治樹(2007) 有能なコーチとなるには何が必要か—コーチ論序説—。中村敏雄編 現代スポーツ論評17。創文企画：東京, pp.40-55.
- 内山治樹(2013) コーチの本質。体育学研究, 58：677-697.
- 桜井 厚(2002) インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方。せりか書房：東京, pp.39-40.
- 桜井 厚・小林多寿子(2005) ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門。せりか書房：東京, pp.50-52.
- 桜井 厚(2012) ライフストーリー論 現代社会学ライブラリー7。弘文堂：東京, p.6.
- 佐藤臣彦(2011) コーチングの哲学。2011 Philosophical Exploration of Sport and Dance, pp. 59-73.
- ショーン：佐藤 学・秋田喜代美訳(2001) 専門家の知恵。ゆみる出版：東京, pp.1-128 (Schön, D.(1983) The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action, Basic books: New York.)
- 豊田則成・中込四郎(2000) 競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討。体育学研究, 45：315-332.
- William B. Streat(1998) Possibilities for Qualitative Research in Sport Psychology. The Sport Psychologist, 12: 333-345.
- 山崎浩司(2011) 質的研究の技術1—基本編—。日本認知ケア学会誌, 10(1)：106-113.
- 吉田 毅(2012) 競技者の現役引退をめぐる困難克服プロセスに関する社会学的研究：車椅子バスケットボール競技者へのキャリア移行を遂げた元Jリーガーのライフストーリー。体育学研究, 57：577-594.
- 岡子浩二(2010) スポーツ選手や指導者に役立つ実践の学としてのコーチング学の一つの方向性。スポーツ方法学研究, 23：99-104.

平成26年11月27日受付

平成27年3月8日受理